

サマーズの信念と怨念

株式市場は不安定で、為替市場では全般的にドル弱含み傾向が続いているが、市場でのホットなテーマの一つがインフレと中央銀行の金融政策であることには変わらない。

その中で昨日元米国財務長官のローレンス・サマーズが FED の金融政策を厳しく批判した。アトランタ連銀主催の会議でのことだ。サマーズは米国経済の長期停滞論を唱えるなどエコノミストとして影響力を持ち続けている。

彼によれば現行の政策は、物価の安定と金融システムの安定に対するリスクを非常に過小評価している。現在立ち向かわなければならないリスクは経済の過熱、資産インフレ、過剰債務、それらの結果としての金融の不安定化である。FED が重視する労働市場の弱さは主要なリスクではなく、過大評価されている。街の実態は人手不足だ。

FED が主張するように、物価上昇を一時的なものとして見て政策対応しなければ否が応でも金融引き締めには追い込まれる。これは市場に衝撃を与え、金融市場の安定を損ね、実体経済へも大変なダメージを与える。

サマーズは以前にバイデン政権の財政支出計画を巨額過ぎてインフレ制御が難しくなると批判した。これで財政・金融両政策を批判することになり、民主党員でいながらバイデン政権の経済政策の全般的な批判者になった。

インフレ懸念を強めるのはサマーズのようなエコノミストだけではなく、ヘッジファンドや資産運用者など市場参加者にも多い。金価格や原油などコモディティ価格が強まる傾向はその表れでもある。

アトランタ連銀主催での発言との点から見ると、FED の中にもインフレ率は上昇しても一時的であるとの FED の統一見解と距離を置く者がいる可能性がある。

今日は前回の FOMC の議事録が発表される。従来の意見とは違ったニュアンスの議論もあったのか、それで FED の債券購入額の減額（テーパリング）の可能性を読み取れるような示唆があったのか。その点が注目だ。

それにしてもサマーズの批判は気合が入っていた。それで思い出したのはバイデン政権の経済政策の司令塔である財務長官のイエレンが財政支出を発表したときの高揚感だ。その後彼女は勢い余ったのか金融政策にまで言及した。両者の張り切る様は甲乙つけがたい。

イエレンがFEDの議長に昇格するときに、サマーズも候補だった。エコノミストとして財務長官として実績もキャリアも十分で有力だったが、イエレンが勝った。プライドの高いサマーズが女性のイエレンに負けたのは口惜しかったに違いない。

その時の怨念でもあるのか。サマーズは財政政策と金融政策の背後にいるイエレンを意識している気がしてならない。